
Mr . Invalid

白井雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Mr.Invalid

【Nコード】

N9518J

【作者名】

白井雪

【あらすじ】

発作持ちの高校生シユウは、ある出来事をきっかけに自分の生まれ育った町を捨て、あてのない旅に出る。

発車間際の列車に飛び乗ったシユウは、そこでサーシャという少女に出会い、奔放ながらも力強いその生き方に影響されていく……。しかし、シユウは決して抗うことのできない運命を背負っていた……。

（前書き）

子供の頃は誰でも、「冒険」「旅」という言葉に憧れたことがあると思います。もちろん、私もその一人です。

この物語は、そんな私の憧れや夢をめいっぱい込めてつくりました。

冒険小説にしては短めで、現実から離れすぎず読みやすいものが心がけましたので、ぜひ覗いていって下さい

ハイスクールから帰宅すると、必ずすること——うがい、手洗い、そして、アルコール消毒。

しかし、今日のシュウはいつもとは違っていた。ワックスをつけた黒い髪は乱れ、どこか緊張したようにその顔をこわばらせている。更には、靴の砂を取ることも忘れて家に上がり込んだ。肩を振りながらおおまたでフローリングの廊下を進む。そして、急いだ様子で階段を上り自室に飛び込んだ。

しばらくの間部屋でござそそとしていた後、彼は大きなリュックサックを持って出てきた。その顔には焦りと、うつすらとした汗が浮かんでいる。

早くしねえと、かーさんが帰ってくる——。

シュウ・アラルバードはそう思いながら、今度はキッチンへ向かう。

キッチンは、母さんの趣味の家具で揃えられていた。ダイニングテーブルや食器棚は、ほとんどが褐色で地味だが落ち着いた雰囲気だ。

かわいいテーブルかけやオレンジの臭いが、食堂を彩っている。母さんはきれい好きで、一日の大半をここで過ごしている。母さんの料理は、シュウが知る限り世界で一番おいしかった。

いつもならそこでビスケットを数枚持って宿題に取りかかるのだが、今日のシュウはやはり何か違う。冷蔵庫の前にしゃがみ込み、普段は気にもかけないその中身を覗き込んだ。

さすが母さんだ。中には食べ物がある山の山のように積まれていた。ワインナーやベーコン、バター、アボカド、クランベリーやレモンなど数種類の果物……。

シュウはそこから、缶詰や長持ちしそうな食べ物を選んでできるだけ沢山リュックの中に放り込んだ。かなり乱雑に入れたため、

奥の方では何かが潰れてすっぱい臭いを放っている。

旅の準備をしているうちに、シユウはどんどこからの旅にワクワクしてきた。一人旅などもちろん生まれて初めてだ。今の彼の胸には、旅への不安よりも期待が溢れていた。

次に、シンクの下からフォークとペティナイフを取り出す。それを壁にかかっていた白いナプキンでくるくると包んでから、リュックのポケットにしまった。

少しずつ準備が整ってくる。本当は前日から用意しておきたかったのだが、両親に勘づかれればこの旅の計画はすべて台無しだ。何せシユウは、両親にも友人にも誰にも秘密で、家を出るのだから。シユウは、大量の食べ物ですっかり重たくなったリュックをズルズルと引きずりながら、もう一度階段を上る。そして、リュックを自室の入り口に置いてまた中に入った。

何の変哲もない、十八歳の少年の部屋だった。男の子の部屋らしく隅にはサッカーボールやCDが転がり、ゴミ箱には残念な点数のテストが葬られている。

机の上は教科書が乱雑に埋めつくし、壁には野球のユニフォームがかけられていた。

眠るつもりもないのにベッドに寝転んだり、マンガを読んだりしてぐずぐずゴロゴロしていたいが、そうもできない。母さんが帰ってくる前に家を出発しなければならなかった。

季節はまだ八月下旬だったが、シユウはクローゼットからマフラ―や手袋などの防寒具を取り出して、リュックに残っていた最後の隙間に押し込めた。

それから、その奥に隠していた金貨の入ったピンを頭の上に持ち上げると、一気に床に叩きつける。

けたたましい音をたてて、長年の汗と涙の結晶がワレモノと一緒に散乱した。シユウは少し寂しさを覚えたが、指を切らないように気をつけながらいそいそとその金貨を拾い集める。思っていたよりも数が少なかったことに若干がっかりしながら、彼はポケットをい

っぱいにして立ち上がった。

この部屋とももうお別れだな――。

シュウはしみじみとしながら、十八年間過ごしてきたプライベートルームを見回す。

くすんだ白い壁についた傷や汚れが、急に愛しくなった。こうすることは前から決意していたが、それでもやはり寂しくて――どこかでまだ迷っていた。

十八歳といっても、まだまだ子供だ。シュウも、一人の男になりたいと憧れるただの少年だった。スポーツやオムライスが好きな、何の変哲もない元気な子供――きれいなその顔は遠くを見つめているように無表情だったが、何かに悩み苦しんでいるようにも見える。それが旅立ちの理由となり、少年を動かしているのだろうか。

一人きりで旅に出るとは、きつと相当の決意に違いない。その目は妙に大人びた灰色で、シュウには似合わない。

――しかし、どんな事情があるうと時間は待つてはくれない。ふと時計に目をやったシュウはびっくりして小さく叫ぶと、金貨の入ったポケットをジャラジャラいわせながら引き出しに駆け寄る。

「あぶねーあぶねー、死ぬとこだった」

そう言いながらシュウが取り出したのは、薬のカプセルだった。病気の薬だろうか。シュウはそれをもう片方のポケットに入れて、部屋を飛び出した。

夏ももう終わりに近かった。日がどんどん短くなってきた。もうじき夜がやってくるだろう。

長年住んでいた家を出ていくために扉を開けると、夕暮れ時の独特な太陽の光が少年を照らし出した。眩しくて光を手で遮りながら、後ろ手でドアを閉める。ガチャンという音が、妙に耳の奥まで届いた。

見慣れた町は静かだった。両隣も向かい一面もきれいに民家や商

店が並び、大きな通りが一本駅まで続いているのだが、不思議なことにひどく人氣が少なかった。知り合いに顔を見られずに済むのは好都合だが、拍子抜けしてしまう。

家路につくサラリーマンの冴えない顔を見ると、何だか旅立ちの高揚が薄れて自分まで気が滅入ってくる。

思い出の詰まった町なのに、最後に見る景色がこれとは——シュウは多少げんなりしながら、リュックをしっかりと肩に背負って後ろを振り返る。

そこには、いつもと何も変わらない様子で自分の帰る家があった。オレンジ色に染まる木造だての家は、十八年間ずっとこうして自分を迎えてくれた。冬は雪から、夏は日差しから守ってくれた。シュウは急に悲しくなつて、かなり古くなつた扉にそつと触れる。優しい木の手触りが、余計に寂しくなつた。

「——またな」

シュウはそう短く言つて笑つと、今度は振り向かず歩き出す。決して叶うことのない言葉だった。それはシュウ自身もよくわかっている。しかし、思わずそう口にしてしまった。

シュウは、最後に歩く町の風景を楽しむ。コンクリートの地面は夕焼けでオレンジ色に塗装され、自分の長い影だけが黒いままくりぬかれている。背の高いそいつは、まるで自分ではないようだ。

シュウはもう寂しくはない。彼には、大好きな町と家が、自分を見送ってくれていることがわかつていた。

「わああああ！ その列車待ったあ！」

叫びながら、シュウはホームへと続く階段を駆け下りる。そして、駅員が警笛を吹き鳴らす中、今にも発車しそうな列車に飛び乗った。

——ほぼ同時に、後ろで列車の扉が閉まる。

「ふー、あぶねーあぶねー、死ぬとこだった」

シュウは服が挟まっていないうちに気にするように、自分の背中を見ながらつぶやく。幸い、灰色のパーカーはドアに噛まれていなかった。

落ち着いて車内を見渡してみると、中は意外にもガラガラだった。帰宅途中らしき乗客もいない。——どうやら、この車両にはシュウ以外の誰も乗っていないようだった。

無人で揺れる電車の中、二人がけの座席が向かい合いながらきれいに並んでいる。窓はすべてブラインドが下ろされ、かすかなオレンジ色の夕日が車内を斜めに照らしていた。

いくら能天気なシュウでも、この様子にはさすがに不安になる。ひよっとしたら、回送車に乗り込んでしまったのかもしれない。

そついやあの駅員のオッサン、嫌みなほど警笛鳴らしてたし、俺のことめちゃくちゃ睨んでたよな——。

そんなことを考えながら、シュウは重いリュックを背中に乗せていることもすっかり忘れてこの無人列車の行き先を確認する。

壁にかけられていた銀色のプレートには、こう彫られていた。

——ロゼナ公国行き——

それを見たシュウは、何だか寂しげな顔で微笑む。

そりゃダレも乗ってないわな——。

シュウは途方に暮れたようにふうつとため息をつき、その場に立ちつくした。

ロゼナ公国は、ここアラノーズ共和国から山脈を隔てて北に面した大国だった。世界一と称されるずば抜けた科学技術を誇り、経済の情勢も安定している。にもかかわらず近隣諸国との交流は少なく、独自の文化を守りながら発展を続けてきた。自然環境は厳しく、気候は恐ろしく寒冷らしい。

ロゼナとアラノーズとの間の山々は険しい上に標高も高いため、二つの国の交流はほとんどなかった。線路はそれを迂回する形で敷

かれている。停車駅はほとんどが山の中で、一日中誰も寄りつかないような場所ばかりだった。観光地になるような国でもなかったし、乗客がいないのも不思議ではない。

シュウも元々目的地があつた訳ではない。これも何かの運命だと思ひ、旅を満喫することにした。

誰もいない車内も、よく見れば何だかワクワクしてくる。鉄輪が線路を噛む音と振動を足の裏に感じながら、シュウは徐々に顔に笑みを浮かべ始めた。

「ヒヤッホー！」

シュウは叫びながら跳び上がる。しかし、背中の荷物が重すぎてうまく体が浮かなかった。

車両の先頭まで走る。座席に沈み込むように体を投げ出すと、足を前に放り出した。荷物を隣に置きふんぞりかえりながら、シュウは気持ち良さそうに大きく背伸びをする。

一人旅らしくなってきた。シュウは歌を歌いながら、リュックからスモークチーズを取り出してかじり出す。何だか、一人で遠足にきたみたいだった。

列車旅の醍醐味は、やっぱり車窓の景色だよな。

シュウはそう思い、窓のブラインドを開ける。空は一面オレンジ色だった。シュウはまさに、その風景を独り占めすることができた。懐かしい町並みが、少しずつ見知らぬ地になっていく。学校も家も、もうとつくに過ぎてしまった。いつも通学に使っている通日も、あつという間に横切ってしまった。

シュウは窓を開け、ヒョコツと顔を出した。風が彼の黒髪をなびかせる。少年らしい表情で辺りを見渡していると、ちょうど隣町へと続く橋にさしかかった。

夕日に照らされ、二つの町を隔てて流れるアイヌ川はオレンジ色に輝いていた。どこまでも続く水の流れはまるで留まっているかのように穏やかで、なめらかだった。空には赤みがかつた金色の雲が地平線近くに浮かんでいる。振り返ると、慣れ親しんだ町並みが小

さく広がっていた。

この町が好きだった。この町には沢山の思い出と、大切な人たちがいる。小さな頃からよく知っていて、自分の居場所があった。みんなが自分の存在を認め、無条件で受け入れてくれた。———だけどそれがとても小さな世界であることを、シュウはもう知っていた。とても大好きで大切な町だけど、男に生まれたからには、そこで一生を終えることはできない。

この町を見るのもこれが最後だ。
もうここには戻らない。

頬を風にさらしながら町を見つめるシュウの灰色の目には、揺るぎない決意が表れていた。まだ幼い少年が町を出るとは、何かよほどの理由があるのに違いない。先ほどまでは伸び伸びとしていた表情はひどく険しくなり、切実な思いが溢れ出していた。

戻らない———戻れないんだ。

シュウは心の中で繰り返しそうつぶやく。自分で自分に言い聞かせるというよりも、何度もそう思い知らされるような気分だった。どうしようもない現実を相手に、シュウは打ちのめされそうになりながらも立ち向かっていた。この旅立ちも、そんな少年の戦いだった。

すっかり遠い場所になってしまった町に、少年は涙をこらえるかのように天を仰いだ。暗い水色の空には雲だけがオレンジ色のまま残され、もう北極星が輝いていた。

目を開けて最初に見えたのは、赤い髪の女の子だった。———よく見ると赤ではない。かなり赤に近い茶髪だった。ポニーテールにしたその髪は背中の長さまである。少し面長なかわいい顔はまっすぐとこちらを向いていて、シュウは思わず夢なのではないかと目をこする。少女はリスのように活発そうな茶色い目でそんなシュウに笑いかけた。

「やっと起きたね」

「……………」

快活そうな見かけ通りの声だった。少女はシュウと向かい合った座席に腰かけていて、傍らには彼と同じようにパンパンになったシヨルダーバッグが置かれていた。寝起きで何も言えないシュウに、少女は更に声をかける。

「この列車もシケてるよね。先頭から最後尾まで見たけど、乗ってるの私とあなただけよ」

「ああ、そう」

シュウは少女の言葉に興味がなさそうに答え、窓の外を見た。しかし、何も見えない。トンネルの中なのかと思ったら、もう夜で辺りは真っ暗だった。山の中なのだろう。車輪の音以外は何も聞こえなかった。

「俺、いつの間に寝ちゃったんだろ……………」

前髪をくしゃつとしてつぶやくシュウに、少女はポテトチップをかじりながら言う。

「いつから乗ってたのかは知らないけど、結構長い間眠ってたわよ。ま、ロゼナ行きの列車で時計なんか見ないから、正確な時間はわからないけどさ」

その言葉に、シュウは少女の方に目を移した。彼女はベルトのついた薄いベージュ色のワンピースを着て、短いブーツを履いていた。年は自分より二歳ほど下だろう。けっこうかわいい。

シュウは、目が覚めた時に少女が言った言葉を思い出す。もしかして、彼女はずっと自分が起きるのを待っていたのだろうか。

そんなことを考えているシュウにお構いなく、少女は言った。

「私サーシャ。あなたは？」

「シュウだ」

シュウはニツと笑う。明るく社交的な性格は、二人とも共通のようだ。

どうやら少女——サーシャは、話し相手が欲しいようだった。サ

「シャーは体をシュウの方に乗り出す。

「ねえ、あんたもロゼナに行く気なの？」

シュウは首を振って答える。

「いや、特に目的地はねえよ」

変わったことを言うシュウに、サーシャはげんそうに首をひねる。

「目的地がない？」

シュウはうなずこうとして、突然襲ってきたいつもの痛みを胸を押さえた。それに反応するように心臓が急スピードで働き出す。顔から血の気が引き、汗が頬をつたった。ゲホゲホと苦しそうに咳き込むシュウに、サーシャは仰天して慌てふためきながら言う。

「どうしたのシュウ！？ やだ、狭心症！？」

顔に似合わぬ病名を口にするサーシャに、シュウはかすれた声で言う。

「水をくれ……！」

「えっ？ みず！？」

よっぽど焦ったのか、サーシャはシュウのリュックを開けようとした。しかし、すぐに自分の意味不明な行動に気付き、サーシャのバッグから水の入ったペットボトルを取り出してシュウに渡した。シュウは大きく震える手でポケットから薬を出す。そして、ゆっくりとそれを水と一緒に喉へ流し込んだ。

胸がズキズキと痛み、喉からは出血しているを感じた。頭はフラフラとして息苦しい。シュウはしばらくの間荒い呼吸を繰り返していたが、やがて脈も落ち着いて目を閉じた。

「ああ……死ぬかと思った」

言葉通り死にかけて力なくシートにもたれかかるシュウに、サーシャは遠慮がちに尋ねる。

「シュウ……あんたどっか悪いの？ 喘息持ちとか？」

「……何でもねえよ」

シュウはその話をするのが嫌なのか、小さく首を振った。

「……言いたくないなら別にいいけどさ」

サーシャのつぶやきを聞きながら、シュウは恐怖に体を震わしていた。顔は青ざめ、服は汗でぐっしょりだ。怯えているその姿は、さきほどまで旅に興奮していたシュウとはまるで別人のようだ。

シュウはわかっていた。この地獄のような発作が起きるのは、きつと次で最後だろう。そしてそうなれば——その後のことは考えたくもなかった。

「チョコレート食べる？」

発作が起きてから何も話さなくなったシュウに、サーシャは唐突に訊いた。シュウがにこつと笑ってうなずくと、彼女は板チョコを半分に割って銀紙をつけたまま彼に差し出した。

サーシャは不思議な少女だった。目の前で発作を起こされたというのに、その理由をしつこく問いただすこともなく、気を遣いもしない。もういい時間なのに眠ろうとする様子もまったくなく、サンディッチやサラミをばくついている。

初めて出会うタイプの人間だった。面白くて見つめていると、その視線に気付いて口を開いた。

「あんたもさあ、どうしてこんな列車に乗ってるの？　もしかしてちよつとイカれてる？」

こんな列車というのは、ロゼナ公国行きだからだろうか。シュウはどう答えればいいか言葉に困り、頭をかきながら言う。

「んー、家出だな」

「いえで？」

聞き直すサーシャに、シュウはチョコレートの銀紙をめくりながらうなずく。今の自分の状況にもっとも当てはまるのはその言葉しかなかった。そんなシュウに、サーシャは何を思ったのか突然笑い出した。

「なーんだ。私と同じじゃん！」

楽しそうに笑うサーシャに、シュウは訊く。

「お前、家出してきたのか？」

「まあね」

サーシャは一瞬真つ暗な窓の外に目をやる。微笑んではいたが、彼女がそうして悲しみを隠しているのをシュウはすぐにわかった。「私の両親さ、私が生まれる前に離婚しちゃって、ずっと母さんとロゼナで暮らしてたの。だけど五年前にその母さんが病気で死んじゃって、頼る人がいないから仕方なく父親ん所に行ったら、そいつがもうサイアクなの！」

サーシャは服の袖をまくる。白くて細い彼女の腕には、痛々しい刺し傷が手当てもされずに放置されていた。まだカサブタにもなっていないので、最近できた傷らしい。

「これ以外にもいっぱいある。――頭にきたからさあ、私オヤジのお金パクって家飛び出してきたの」

困ったようにサーシャは笑った。彼女の口調と表情は相変わらず明るかったが、きつと悲痛な体験をしたのだらう。視線はどこか遠くを向いていた。まだ現実に目を向ける余裕がないかのよう。

シュウはそんなサーシャに強く胸を打たれた。苦勞して育ったのだらうに、彼女の生き方は力強くて前向きだった。嫌な過去も開けっ広げに話す様子からは、陰惨な記憶から目を背けず、それも人生の一節として楽しもうとしているの姿勢がうかがえる。――いつも心の奥で泣いている自分とはまるで正反対だった。

「お前、強いヤツだなあ」「よく言われるわ」

サーシャはふつと笑った。

他の大多数の人間と同じように、シュウも出会ってすぐにサーシャのことが好きになった。彼女の側にいると、自分まで勇気が湧いてくるように感じた。怖いものなど何もないようにさえ思える。サーシャのように立ち向かう強さがあれば。

「ロゼナに戻るのか？」

シュウは家から持ってきたオレンジを半分に切る。「んー、そう

だねえ。アラノーズも嫌いじゃないけど、オヤジに見つかったらマジで殺されるだろうし、どこも行く当てないしね」

サーシャはシュウからオレンジを受け取ると、冗談っぽく言った。「どうせならこのままずっとここに乘ってよっかな」「おー、そうしろそうしろ」

否定しようとしないうに、サーシャは笑った。オレンジを食べ終わると、彼女は突然窓を開けて顔を出した。

夜の冷たい風が入ってくる。山の空気は澄んでいて心地よかった。虫の声を聞きながらしみじみと木々の臭いを感じているシュウに、サーシャが弾んだ声で言う。

「シュウ！ 見てみなよ！ 星がいっぱい！」

「星？」

シュウはサーシャと同じように窓から顔を出す。外は一度も来たことのない山奥だった。嬉しそうに空を見上げるサーシャに、シュウも顔を上げる。

サーシャの言葉通りだった。墨を流したような空には濁った雲一つなく、今まで見たこともないほど沢山の星が輝いていた。青いものも白いものも、桃色のものもあった。よく見ると、星明かりで山が照らされているのがわかる。葉の一枚一枚や、静かに流れる小川も、昼間と同じように見ることができた。ダイヤのように輝く星たちはとても幻想的で、まるで宇宙の中に迷い込んだかのような錯覚さえ覚える。

「ロゼナの星はきれいでしょ」

サーシャは自分の故郷を自慢して無邪気に笑う。その笑顔に、シュウもにつこりと笑った。今まで来たことのない国に来るのが、こんなに楽しいことだとは思わなかった。この景色を見ただけでも家を出た価値があった。

「ねえ、さつき目的地がないって言ってたけど、そんならあんだどうして旅をしてるの？」

「どうして……」

シュウの笑顔が一瞬にして凍りついた。サーシャにいぶかしげな目で見られ、シュウは列車の中に引っ込む。

「ねえ、何で家出なんかしたのよ」

発作を起こした時とは違い、サーシャはしつこく訊いてくる。鼻がくっつきそうなほど顔を寄せてくる彼女に、シュウは目を見開いた。

「シュウ、その目……」

サーシャは、シュウの目の虹彩を見て信じられないというようにつぶやいた。シュウはその視線を拒絶するように、目をそらす。

シュウの目の色はとても特徴的だった。それは、色素が抜けたようなほとんど白に近いグレー——銀色といってもいいような色彩だった。雪のように繊細で美しくはあるが、一方で病弱そうな印象も受ける。

物悲しげにその目を伏せるシュウに、サーシャは少しためらいながらも言った。

「私、あんたと同じ目を見たことあるわ」

「……………」

シュウはサーシャの顔を見上げる。怯えた子供のような目だった。彼はサーシャが何か言う前に口を開いた。

「……バレちまったもんはしょーがねーな」

シュウは大きくため息をついてから、覚悟を決めたようにサーシャの目を見据えた。

「俺はダースブラッジだ」

サーシャは驚かなかった。

「もう長くない」

真夜中になり、列車の電灯はすべて消えてしまった。暗闇の中だと、座席が並んでいるだけの車内はひどく不気味で、運転手が乗っていることさえ不確かに思えてくる。窓の外の景色もよく見えるよ

うになり、恐ろしい亡霊の姿でも浮かび上がってきたそうだ。

シュウとサーシャが向かい合う間には、サーシャのランプが置かれていた。その弱々しい火は、列車の振動に合わせてゆらゆらと揺れる。二人の周りだけが、ぼうつとした暖かいその光に包まれていた。ランプの火を見つめるシュウの目も、今だけはきれいなオレンジ色に染まっている。

ダースブラッジは、突然何の前触れもなく発病する原因不明の難病だ。その発病者は性別も年齢も関係なく、みな突如発作を起こすことによつて初めて自分がそれを発病したと気付かされる。——シュウの場合、発作が起きたのは生後一ヶ月頃だった。

ダースブラッジの発作は、死ぬほどの激痛と呼吸困難を伴う。それは回を重ねる毎に激しいものとなり、最後には体がそのショックに耐え切れず死に至るといふ恐ろしい病だ。ダースブラッジ患者は、そうして十年以上も死の恐怖と地獄のような苦しみを相手に闘わなければならぬ。恐ろしい最期の瞬間がくるまで――。

ダースブラッジ患者の目は、何故か虹彩が白くなっていくという特徴が見られる。幼い頃は空のように青かったシュウの目も、ここ数年はすっかり煙のような色に変わっていた。

しかし、ダースブラッジには発作とその虹彩の変化以外、何の症状もなかった。心臓や脳の働き、免疫機能、血液中にも、異常は見られない。そのため、患者は健康な人間とまったく同じ生活を営めるものの、有効な治療法もなく、薬で発作を和らげることしかできなかった。

「俺も今までは、ダースブラッジのことはなるべく考えないようにしてフツの生活を送ってきたんだ」

シュウは虚ろな目で、傷の入った床を見つめながら言う。サーシヤは、先ほどの元氣いっぱいな姿からは想像もできないほど、静かに彼の話を聞いていた。

「だけどつい一週間前、かーさんと医者が話してるのを聞いてちゃったんだ」

シュウは一度言葉を切り、自分自身を落ち着かせようと深呼吸した。そして、はっきりと言う。

「一ヶ月以内に、最後の発作がくるって」

シュウはふつと笑うと、無理に明るい口調になる。

「ハイスクールを卒業することも、大人になることもできないんだぜ。俺、それを聞いた後ずっと考えてたんだ。俺の今までの人生って、一体何だったんだろうって」

サーシャは何も言わずに、ただシュウの寂しげな瞳を見つめていた。形は違えど、同じように悲しみを抱えている彼女は、シュウの孤独が痛いほどよくわかった。

病と闘ってきた十八年。何度も死の淵をさまよい、それでもただ少しでも長く生きることだけを考えてきた。不公平を嘆くこともあったが、自分が惨めになるだけだと思い知った。

シュウは自嘲する。

「——何もなかった。ただ、逃げてきたんだ。ダースブラッジや死ぬことを考えるのは怖くて——せめて、その時その時を楽しもうと必死だった。それが、小さな世界に浸って満足した気になってるって、ホントは心の中でずっとわかってたのに……」

シュウは顔を上げた。その目には今までとは違い、夜の星のように輝いていた。それはまるで、初めて見るものに興奮している子供のものだった。

「だから決めたんだ。最後くらい、ヒーローになってやるって。ワクワクするじゃん？俺が俺のヒーローになるんだ。今までの小さい世界を抜け出して——」

「それで旅に出たのね」

確認するようにそう言ったサーシャは、別人のように大人びていた。暗闇の中でランプの火に照らされているからだろうか。

サーシャは、苦しみや恐怖の理由を告白することにどれほどの痛みと、勇気が伴わなければならぬか知っていた。それだけに、彼女は自分まで胸が締め付けられるような悲しみを感じていた。

険しい表情のサーシャに、シュウは悲愴な顔で笑う。

「ずっと誰かに聞いてもらいたかったんだ。でも、誰にも言えなくて……悩んでる姿を誰にも見せたくないかった」

シュウは膝の上に置いている手を握りしめた。その手は小刻みに震えている。

「ずっと怖くて震えてるんだ。——眠るのが不安でたまらない」

握りしめた手の甲に、ぱたぱたと滴が落ちる。サーシャはうつむいたシュウの顔をじっと見つめていた。

「生きるために逃げてるお前を見て、ホントにうらやましかった。俺は結局、死ぬことから逃げてるだけなんだ。今までと何も変わらないよ。生きることからも目を背けてる」

シュウの青白い頬に涙がとめどなくつた。サーシャは立ち上がって、何も言えなくなってしまったシュウの涙をぬぐった。

「……………」

シュウは顔を上げ傷付いた目でサーシャを見る。彼女の目にも、涙がたまっていた。

「泣かないで」

サーシャはシュウの目を覗き込みながら、彼の頬をなでて言った。そして、瘦せた彼の体をぎゅっと抱きしめる。驚いて真っ赤になるシュウの耳元で、サーシャはささやくように言った。

「大丈夫……私があんたを助けてあげる」

サーシャはシュウから体を離す。彼女の言葉に、シュウは涙をこすりながら不思議そうな顔をする。そんなシュウに、サーシャは彼の肩を掴みながら言った。

「私と一緒にロゼナに来て。ダースブラッジは、絶対に治してあげるから」

「……はあ？」

シュウは、ますます不思議そうな顔をする。彼には、サーシャが何を言いたいのかわからなかった。ダースブラッジは不治の病だ。治すことなどできない。

「お前、今までの話聞いてたか？ そんな風に気合いで治せるくらいなら号泣してねーよ！ 恥ずかピー」

「五年前まではね」

肩を握る手に力が入る。サーシャのいつになく真剣な表情に、シユウはまさかというように目を見開いた。

「五年前って……」

サーシャは小さくうなずく。彼女は無表情だったが、そのしぐさには物悲しさが漂っていた。

「私の母さんもダースブラッジだったの」

「……でも」

「でもない」

サーシャは首を横に振る。

「ロゼナにはあるのよ。世界にたった一つしかないダースブラッジの治療薬が——」

サーシャの目は真実を語っていた。そのまっすぐな眼差しに、シユウは今までの人生でもっとも心強い気持ちになれた。

「……」

言葉が出なかった。ずっと切望していたものの存在を、こんな形で知ることになるとは。素晴らしい不意打ちだった。とてもすぐには信じられそうにない。

「お前それウソじゃないだろうな。もしウソだったらうつすぞ」

無論、ダースブラッジはうつらない。

「そんなウソつく訳ないでしょ。本当よ！ あんたの病気は治せるの！」

「……はは。アメイジング！」

シユウはそう叫ぶと、大声で笑い出した。サーシャはそんな彼の手を握って、繰り返す言う。

「治るのよ」

その一言に、シユウは心から救われた。十八年間ずっと彼の心を縛りつけ、蝕んできたものはもうどこにもない。もう震えてもい

かった。

こらえ切れず、シュウはまた泣き出した。嫌になるような心の痛みも嘘のように消えていた。代わりに、感動で胸が燃えるようだった。

「俺、死なないんだ……」 つぶやくシュウに、サーシャは優しく言う。

「死なないわ。ずっと隣にいるから、そんな悲しいことを考えるのはもうやめて」

何も言わずにうなづくシュウ。サーシャはそんな彼にウィンクしながら言った。

「だけど、ロゼナに着く前に発作を起こさないでよ。朝になるまで眠ってなさい」

本当に眠っていたのかもわからないほどあつという間に、朝はやってきた。夢を見る間もなかった。目を閉じて、もう一度開けた時には空は明るくなっていた。ランプの火も消えている。

今まで生きていた中で、こんなにすがすがしい朝を迎えたことがあつただろうか。心を縛るものは何もなく、気分は空を飛ぶように軽い。涙の跡が少し照れ臭かったが、今ならどこへでも行けるような気がした。

窓を開ける。途端に、冷たい風が飛び込んできた。アラノーズの涼風とはまったく違った、冬の空気だ。山の木々はもうすっかり葉を落とし、遠い稜線には白い雪が積もっている。何の音も聞こえない。太陽はまだ昇っておらず、濃い水色の冬空には藍色の雲が朝の光に追いやられるように広がっていた。そのただ中で、薄い黄色をした細長い三日月が姿を消そうとしている。

もうロゼナに着いたんだ――。

思えば、列車も停まっている。さびれたホームを見渡すが、そこには車内と同じように誰もいなかった。

シュウは、すっかりしぼんでしまった自分のリュックサックを見る。そして、向かいの座席に目を移した。

そこには誰も座っておらず、まったくのカラッポだった。ポテトチップのカスも、チョコレート銀紙も、オレンジの皮もない。

シュウはそれを見て、驀然と理解した。今までのはずべて夢であつたことに――。

シュウは、静かに床の上のランプを見下ろす。その目は懐かしいことを思い出しているかのように優しく穏やかで、物寂しかった。リュックを背負うシュウ。中身はほとんどカラッポで、とても軽かった。金貨が沢山入っていたポケットも、ずいぶん歩きやすくなっている。

腰をかがめてランプを持ち上げようとした時だった。

「シュウ！」

開け放していた窓の向こうから声がした。その声を聞くのは久しぶりなのに、何だかすぐ十分前に聞いたばかりのような気がする。顔を上げた先には、見るのは久し振りなのに、やはりそんな気がしない少女の姿があつた。

シュウはにつこりと笑う。

「サーシャ！」

自分の名を呼ばれたサーシャは、照れ臭そうに言う。

「やっと起きたね」

「……………」

「ずっと待つてたんだよ。今さっきまで隣に座つてたんだから」

サーシャのその言葉に、シュウは床の上のランプに再び視線を戻した。そして、何を思ったのか突然笑い出す。

「なに？ キモチワルイ」

いぶかしげな顔をするサーシャに、シュウは笑いながら言う。

「だつてお前、初めて会つた時と同じこと言つてんだもん」

「そつだっけ？」

シュウの言葉に、サーシャもとぼけたように笑つた。

「目の色、白いまんだね」

サーシャは、シュウのまつ毛に触れながら言う。彼はすぐには返事をせず、列車の窓枠に足をかけるとぽんと軽くサーシャの隣に降り立った。

「いいんだ、これは——」

シュウは独り言のようにそう言って歩き出す。そのあとを追いつながら、サーシャはそつと微笑んだ。

「これが俺の人生だからな」

—END—

（後書き）

まず、最後まで読んでいただいて本当にありがとうございます！！
読後の余韻を踏みにじりたくないなので、物語について語るのはこ
こではやめておきます。

感想を残していただくとともに光栄です！ 次回作も読ん
でくださると最高です

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9518j/>

Mr . Invalid

2010年10月8日14時27分発行